



失敗の快樂

失敗は贅沢だ

最近の日本社会の変化を象徴しているのは銀行だ。以前の単純な銀行業務では預金者から資金を預かって利子を払う。一方で銀行は資金を貸している人からは利子をもらう。うまい具合いに2つの利子の差があれば銀行の業務を続けることができる。

そういう単純な金貸し業務だけでは、国際社会で生き残る銀行になれないという。どうやらリスクをとる業務に進出しなないとダメらしい。このような傾向は銀行だけではなく、個人生活にも及ぶ。なにしろ銀行にお金を預けても、利子はゼロである。

リスクというのは文字通りに危険なものだ。株価は上がるかもしれないし、下がるかもしれない。経済学の長年の研究によっても、株価の予測は困難である。むしろ予測はできないという事実が何度も確認されている。

実際に株を買おうと、株価が上がることもある。下がることもある。そこで一喜一憂することになるのだが、考えてみれば株価が下がって悲しいのは、贅沢な経験である。株を買おうとしても、買うことすらできない人がいるのだ。同じような意味で、スポーツの試合で負けるのは贅沢である。試合に出ることができたのだ。試験で落ちるのは悲しいけれども、試験を受けられなかった人が、本当に悲しい立場である。

失敗は成功のもと

諺にも「失敗は成功のもと」とある。失敗は学習において重要な役割を果たしている。これは理論的にも証明できることなのだ。

人間の学習ではなく機械の場合を考える。たとえば飲料の販売機のような機械を、情報科学では有限オートマトン、または系列機械というモデルで表現する。この販売機のような機械を構成するのに、入力(例:貨幣)と出力(例:飲料と釣銭)の組をたくさん並べる。その正しい入力・出力の組から機械を自動的に構成するのが機械の「学習」の問題である。

結論だけを簡単に紹介すると、正しい入力・出力の組だけから構成できる機械は、実に単純な動作しかできない。普通に販売機と呼ばれる機能を実現するためには、どうしても「間違いの例」を与えて、それを間違いであると認識させないといけない。



人間は販売機よりはずっと高度な仕事ができる。それは「間違いの例」を学習に活用しているからだ。教育というのは正しいことを教えることだと思われているが、実は「間違っていること」を間違いとして教えるのが、教育の本質である。

失敗経験の共有

私がNTT研究所に勤務していたころの上司に西川清史氏(後に大阪大学教授)がいた。彼は自動車ラリーに出場するような運転の達人だ。西川さんによると、安全運転の秘訣は「よく起こる事故のパターンにあらかじめ遭遇すること」だという。つまり事故を起こしかけた経験のある人は、その種の事故を避けることができる。実際に事故を起こしてしまっただけでは安全とは言えないので、これはギリギリの学習である。

車の運転のような経験を他人に伝授するのは難しい。しかし世の中には伝授可能な経験がある。教育というのは他人に経験を伝授するシステムである。

これからの日本社会はリスクをとる。企業でも個人でも失敗が避けられない。そこで問題なのは、失敗を学習に活用できるか否かだ。失敗経験を単に捨てるのでは、もったいない。

人間社会はリスクに対処する知恵を持っている。株式投資の例で言えば、複数の銘柄に分散して投資すべきだ。個人のリスクを社会的にカバーしている例には、昔から保険という仕組みがある。そもそも株式会社という発想も、リスクを分担することにある。

リスク社会を楽しむためには、個人がバラバラでは駄目だ。社会全体の仕組みがリスクを受け止めるように考える必要がある。そして、個人の失敗を社会的な学習の「もと」として活用していく。そのような経験の共有のために情報通信技術を活用する。これが社会の神経網としての通信技術の重要な役割だ。

Illustration: Harada Kozi



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp